コンマイ・コンメエの問題

糸井寛一

「大分県南部では、〃ほそい〃をコンマイ、〃こまかい〃をコンメエと言いわける。これは、ほかに見られない珍しい言い方だ」柴田武氏がこう指摘されたのは、この三月、大分市で開かれた、ある講演会でのことである（要旨プリント）。これがあとで問題になった。当地の松田正義氏が、それはおかしい、大分では〃ほそい〃〃こまかい〃を区別せず、共にコンメエと言うのだが、と異議をはさみ、柴田氏も、現地の実情がそうであれば、と一往自説を保留されたそうである。柴田氏の指摘は、『日本言語地図』第一集の24図（ほそい）、25図（こまかい）を見比べた上でのものであったという。

筆者は、さらに後に、この話を松田氏から聞いたのであるが、柴田氏の説の根拠を聞いて、すこぶる意外に感じた。そこで、『言語地図』を開いて、問題の図を調べてみた。なるほど、24図では KONMAI が、25図では KONMEE が、大分南部に目だつ分布を示している。両図をそのまま重ねてみると、たしかに、柴田氏の言われるとおり、この地域では、〃ほそい〃に当たる方言形はコンマイ、〃こまかい〃はコンメエとなって、対立するように見える。しかし、それは変だ。筆者の知る限りでは、この県では、〃ちいさい〃〃ほそい〃〃こまかい〃を言いわけない、すべてコメエ、コンメエなどで押し通すのが普通である。まして、コンマイ、コンメエのような微妙な音の使い分けで、〃ほそい〃〃こまかい〃を区別するような放れわざをするわけがない。念のために、手もとの、『日本言語地図』作成のための「調査表」を検してみたが、〃ほそい〃と〃こまかい〃とで相異なる方言形の出ているのは、筆者担当の県内四八地点のうち三地点だけで、それも疑いを存するものばかりである。もちろん、コンマイ、コンメエと言いわける処は一つもない。区別なしの [kome:] か [komme:] である地点が大部分である。ほかに、コマイ類では、[ko:me:] [koma:] などもある。

同じ [kome:] [komme:] が、なぜ、24図では KOMAI KONMAI に、25図では KOMEE KONMEE になっているのだろうか。地図をよく見ると、24図では、見出し形に KOMAI KONMAI はあるが、KOMEE KONMEE などはない。25図には、KOMAI KONMAI はもちろん、ほかに、KOMEE も KONMEE もある。KOMAA もある。そこで、前者には、当方の [kome:] [komme:] や [koma:] などは、それぞれ、KOMAI KONMAI KOMAI として出ており、後者には、それぞれ、KOMEE KONMEE KOMAA として出ていると考えるべきであろう。察するに、24図と25図とでは、材料カードにさまざまに表記された方言形を、比較的少ない数の見出し形――その一つ一つに異なった符号が与えられる――に整理し、分類する、そのまとめ方がちがっているのだろう。もし、そうだとすれば、たとえば、24図に KONMAI とあり、25図に KONMEE とあっても、それらで示される実際の方言形が互いに異なるとは速断できない。一方がコンマイ、他方がコンメエと読めるという保証はない。両図を無造作に比べて、〃ほそい〃と〃こまかい〃とが、コンマイとコンメエという形で対立すると見るのはあ

ぶない。この場合、方言の事実に照らし、そのような見方が誤りであることは明らかである。

以上の旨を、筆者は柴田氏に報じたが、氏は、早く松田氏、次いで筆者あての書信で、国立国語研究所で徳川宗賢氏に質し、材料カードにも当たった上でのこととし、問題のコンマイ、コンメエの対立は、地図をやや不用意に見たために生じた「幻の対立」にすぎなかったとして、これを全く取り消された。なおまた、筆者の推察どおり、24図と25図とでは、材料カードの方言形を分類し、見出し形にまとめる、そのまとめ方が異なっていることも明らかになった。25図の方がコマイの類については詳しい分類になっているのである。

それにしても、このように相並ぶ二枚の図で、同じ方言形のまとめ方がくいちがっているのは、このような言語地図を読むのに慣れていない一般の読者に、とまどいを覚えさせる惧れがありはしないか。24図と25図とのあいだで、コマイの類のまとめ方をなぜ変えたのか。筆者には、初め、地図作成者の意図がまるで分からなかった。が、そのうち、24図では、ホソイの類が特に詳しく分類されているのに気づいた。これはと思って、この図の「解説」を見なおすと、その終わりの方に、24図は、「形容詞語尾の連母音-oiにあたる部分の分布を見るに適当な地図」とある。また、続いて、「コマイ類の語形の詳細については、25図「こまかい」においてやや詳しく分類して示した」とある。それでいくらか見当がついた。直前の23図は、22図（ちいさい）の方言形のうち、特にチイサイの類を取り出して詳細に示したものだ。おそらく、ホソイ類、コマイ類については、別図として詳細図を作るのを省いて、24図でホソイ類の、25図でコマイ類の詳細図を兼ねさせたものだろう。とすれば、そこに作図者の苦心、配慮があるわけで、前後不ぞろいだと責めることはできない。

柴田氏の提起されたコンマイ・コンメエの問題を検討することで、筆者は、いい教訓を得た。この地図集を十分に活用するためには無精をしてはならぬということだ。一枚一枚の地図はもちろんだが、何より「解説」をたんねんに読まなければならない。それも、当の項目のそれだけでなく、関連項目の解説を広く見ておく必要がある。しかし、また、これほどの大冊である。これも大きな辞書のようなものと見て、必要な時に必要な個所だけをあけて見る、といった忙しい利用者も少なくないと思われる。そういう利用者のためには、たとえば、25図で、コマイ類の形が特に詳細に示されているといった注意は、地図の方にも、見出し形の欄にでも、出しておく工夫が望ましい。

最後に、これは柴田氏も強調しておられるが、たとえば、〃ほそい〃と〃こまかい〃、「こういう意味上きわめて近い関係にあるものは、体系の地図」がほしい。「ホソイとコマカイをまず、A区別しないところ、B区別するところとし、さらにどう区別するかで書き分ける」そういう図がほしい。読者が勝手に一枚一枚の図を重ねて体系の地図を作ると失敗する。「補遺篇」にでも、そういう図を期待する。

（一九六八・四・三）

付記　この文を草し終えたところに、徳川氏から来信、今回の問題に関し、作図者の側からの懇切な説明を与えられた。24図、25図のコマイ類の繁簡は、ほぼ、上に筆者の推測したような理由によるとのこと。また、「24図、25図の間での「くいちがい」がもし異なった作図者によって別々の基準で分類が行なわれたために生じたと

想像されるなら、それは違っていて、むしろ同一の作図者が各図を別々のものと考えずに、一体のものとして考えたために生じたもの」と考えてほしいとのことであった。

―大分大学教育学部助教授―